露出しているのだ。腸も、胃も、眼球も、脳も、ペニスも、肝臓も、心臓も、すべての器官が光のもとに照らしだされていた。まるで、地面に写る影のように、立方体の影が、X氏そのものとなって、降り注ぐ光のカーテンのなかに写しだされている。光は、あらゆる方角に、垂直にのびたところから降ってきた。X氏は、はっきりと、実体だと思っていた自分の身体が、実は、単なる立方体の影にすぎないと知った。器官のない身体となったX氏は、ひとつの点になって、腸や心臓や耳やペニスを眺めていた。

おどろきが哄笑になった。笑って、笑って、すべてを笑いの渦と化し、自分というものを終りにしてしまいたかった。まるで、無からすべての物質が顕現した瞬間を見る思いだった。形も色も、意識も感情も、まったく意味がなかった。途轍もない大きなゆらぎの波だけがあった。それを、いったい、なんと呼べばいいのか、X氏は知らない。

明るい無数のゆらぎの波がざわめいている。波は、巨大な織物となって揺れ、移動していた。

X氏は、けいれんしていた。ふるえていた。ゆれて、ゆれて、光の波のひとつとなって、電子たちの音楽の音符となり漂っている。光がX氏だった。ビッグ・バンの風が吹いた。寒さが来た。とても、寒い。光があふれているのに、魂の芯まで凍る寒さだ。歯の根が合わず、カチカチ音をたてて、ふるえている。宇宙には、寒さと暖かさがあるが、寒さの限度があるとすれば、それがこれだと思った。





肩に熱が戻った。重い。肩がゆれている。光が消えた。眼の前が、一瞬、白くなって、何も見えない。まっ白になった眼の前に、ゆっくりと色が、形が、硬度が、甦ってくる。右肩が、熱く、重いので、振り返った。人の顔があった。いや、人の顔だとわかるまで、3秒かかった。それを眺めていたが、妙な形をしていた。

——どうかしましたか

X氏は、白痴同然の顔をしていた。

——大丈夫ですか。夢にうなされているみたいに、辛そうな声をだして。気分でもわるいのですか。まあ、まあ、ふるえているのね。これだけ雨が続けば、誰だって、少しは、おかしくなりますよ。青空が戻れば、元気になりますから

——僕、何かしましたでしょうか

——いいえ、何もしてませんよ。ただ、電車を待っていただけで。心配いりません。本当に、少し疲れたのね。衰弱はいけませんよ。まだ、堕落のほうがましですって

顔も身体も全身が丸い曲線で触ると滑ってしまいそうな中年の女が眼を細めていた。

——誰にも迷惑はかけなかったでしょうか

——放心していたのね。よくあることよ。何かを思いつめると、遠くを見たくなるものだわ

女は、X氏の肩に置いた白く丸い手をそっと離して、雨傘の柄を強く握りしめ、声に力を入れ